

エッセイ 古本屋の仕事場十七

和本と図書館 保存と公開

橋口 侯之介（誠心堂書店）

S 和本が持っている個別の情報

このところ、各地の図書館などでお話しをさせていただく機会がたびたびある。わたしたちがいうところの和本、すなわち「和古書」について、一般市民の方々にお話しするのだが、図書館スタッフの皆さんも同時に並々ならぬ興味を持って下さる。もっと知りたいという知識欲が旺盛だと感じた。

知っているようで知らないことが多いのが和本の世界である。たとえば、今の奥付に相当する「刊記」の読み方は難しい。現代の奥付とは考え方が違う。それは江戸時代の出版の特殊性から来るもので、板木が売買される求板や、何店かで出版権を持ち合う相合板などは、近代以降もさることながら、中国や欧州でも見られない形態である。だから、いつの本なのか、どこが版元なのかなどを正しく読み取ることが難しい。

和本は写本も数多く伝わっており、重要性も高い。その奥書の読み方

も容易ではない。し

かし、わかってみれば「目からうろこ」

が落ちるように和本

への知識が増大する。

となれば、ますます

和本に興味を持てる

だろう。

そこで気づくこと

は、同じ本（つまり

同一書名、同一著者

の本という意味で）であつても、それぞれが皆別の本であるということ

だ。発行上の時間的経過に伴う「履歴情報」、伝存の過程で書き入れや識

語のような付加される「個別情報」など、ひとつひとつが異なつた諸相

を持つており、決まり切つた書誌情報だけではない数多くのバリエーシ

ョンがある。各地にある本と比較すると、さらに多くの異なりが見つか

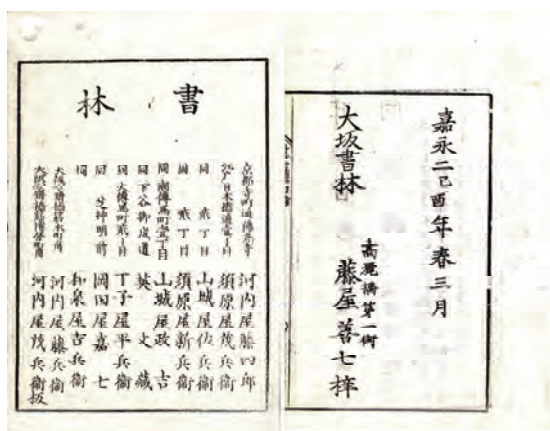
るだろう。それでいて、どの本とどの本が同じ（くくり）に入るのか、

区別すべきなのかという判断も必要になる。

近代以降の洋装本の場合、大量生産、大量消費に伴い、「同じ本」がい

くつも存在する。その間のバリエーションも少ない。したがって、最近

の図書館の多くは、二部以上持たない方針になっていると聞く。置き場



寛政元年に成つた『甘藷百珍』の刊記。嘉永二年に藤屋善七が出したものを、さらに河内屋茂兵衛が後印した。一体どう関係づけて刊行情報を書くべきだろうか。

所が足りないという悲鳴からきたことなら仕方ないことだが、その考えを和本にまで広げないで欲しい。和本はこの世に一つとない本ばかりだからである。

S本を残すといふこと

つねづね、ものとしての本(ハードウェア)を残すことも大切だが、それと同じように和本につまっているソフトウェアの部分も知識として残していただきたいと念じている。施設をつくり、そこにに入れておけばとりあえず保存はできる。しかし、古典籍を残すためには、それに伴う(知識)を同時に伝えなければ意味が無い。文化を残すのである。そのためには、「人」を育ててほしい。和本を残す設備だけを作ってよしというのでは、たんなるものの保管に過ぎなくなってしまう。

一般の市民図書館は公開のみで、保存には力を注がない。一方、和本を持つような大きな図書館や大学などでは、和本なら何でも「貴重書室」とか「古典籍室」に入れて厳重に管理している。いったん、そこに入ってしまうと、申請書やら紹介状やら面倒な手続きが必要なうえ、一回に一点限りとか、写真、コピー禁止となることがふつうだ。最近ではデジタル画像が公開されるようになったため、そちらを利用せよ、ということ貸し出しをしてくれないケースも増えた。もつと古典籍への興味や親しみを持って欲しいのに、これでは結局、利用者の多くを萎縮させてしまう。

たしかに、中世以前の古写本・古版本、あるいは絵巻などは本当の意味で貴重書なので、保管に厳重であってよい。しかし、江戸時代の今でも容易に入手できるような本までいっしょにされてしまうのは困る。

和本は、紙質(これが重要)、サイズ、重さ、製本形態、刷りの善し悪し、書体、書き入れの状態、保存程度など実物を見なければならぬことが多い。画像や、ましてや活字に翻刻されたものがあると、「それだ読めばいいじゃないか」式に考えてしまうと、見失ってしまうことが多いのだ。

デジタル画像を公開するようになったとはいうものの、中にはひどい画像が多い。曲がったままのゆがんだ写真や、色がおかしいもの、コンラストなどがなっていないものなど、実物とまったく異なるままの画像を「公開しています」はひどい。資料を見る価値を損なうだけでなく、そもそも本に対する愛情が感じられない。

保管と公開の両立は、どちらに重点を置くべき本なのかを個々に区別することができれば容易である。もし、保管に重きを置くべき本なら、実物を見ないでもすむ程度まで情報を細かくとっておき、それをよくできた画像と合わせて公開する。そうでないものは、積極的に公開してほしい。知識を有する人がいれば、公開のあるべき意味がわかる。その判断ができる人材を育てるべきなのである。見たければ見せてやるという姿勢でなく、利用者を増やす努力をしてほしい。せっかくそのような意欲あるスタッフがいるのだから。

§ 岩瀬文庫の実例

こうした問題を解決して実践している図書館がある。愛知県西尾市の岩瀬文庫である。

実業家・岩瀬弥助によって明治期から昭和の初めまでに集められた約八万冊の蔵書をもとに設立された文庫で、現在は西尾市立図書館の一部となっている。明治期は近世の反動で古典籍が軽視される傾向があった。岩瀬弥助はその資産の重要性を生かすべきであると考え、収集に努めた結果、現在では入手困難な貴重書籍多数を守った。ディレクタンテイズムの向きもあるが、それがかえって珍しい本の集積となった。

西尾市がこの文庫を、さらに国内初の〈古書ミュージアム〉として博物館法に基づく施設としたことにユニークさがある。スタッフは学芸員が中心となって運営されていて、さらに市民のよるボランティアが大勢いる。文庫を博物館とすることで、書籍の保存と公開についてしっかりと考えた提示された。ここの考えは、公開を優先している。それができるのは、全点の「悉皆調査」をしたことだ。

名古屋大学の塩村耕教授を中心として、徹底した再調査をしたのだ。そこで価値ある本が再発見されるなど、大幅な見直しができた。その成果をもとに、内容の濃い書誌データベースも公開されている。教授をはじめ、ボランティアの人までが、一般の人にもっと古典籍になじんでもらおうという精神で活動しているのが何より良いのである。

このたび、私は岩瀬弥助の志を末永く継承するために、書物文化につ



いてのユニークな研究や功績のあった人を五年ごとに奨励・顕彰する第二回岩瀬弥助記念書物文化賞というのを頂戴した。古書店主の目を通して、和本の持つ魅力を分かり易く解説、一般の人に興味を持てるように努めたことなどを評価していただいたものである。

常々尊敬していた文庫だったので、大変光栄なことだと思っている。いっしょに受賞した鈴木俊幸・中央大学教授（前列左）は、いうまでもなく近世出版に関するエキスパートだし、高野明彦・情報学研究所教授（同中央）は、難しい情報理論であるが、それを書籍の利用のためにわかりやすく応用している人である。神保町古書街のポータルサイト「じんぼう」の運営もして下さっている。

§

§

インターネットによって各地の古典籍が検索できるようになったが、正直、不十分なデータのままである所が多い。全国で悉皆調査をしてほしいと常々思っているくらいだが、おそらく人が足りないだろう。きちんとした画像も撮ってほしい。

文化を守るといふことは、つまるところ人を育てるといふことである。岩瀬文庫の例にならって、有効にお金を使っていたきたいものである。